

卷 頭 言

平成十一年は、国文学科設置から数えてちょうど五十年にあたる。そしてまた、「国文学科」という名称の最後の年となった。次年度からは「日本語日本文学科」となる。先学が手塩にかけて育んできた歴史を思うと、哀惜の想い如何ともし難いものがある。その想いを胸に、今後も『相愛国文』を我々の情報発信の拠点としてゆきたいと思つてゐる。

新しい時代の『相愛国文』の役割を考えるに、一つは日本古典の知的財産を伝えてゆくことであり、今一つは次の千年に残す新古典を生み出す礎となることにあると思う。本学が、古典の文献研究や資料保存に大きく貢献してきたことは贅言を要しない。古典文学の価値を伝えて来たことは我々の誇りであり、その基本姿勢はこれからも毫も変わりはない。と共に、世界同時的なコミュニケーションが可能となったこの現代において、日本語による思考と文化が、今後の社会にどのような役割を果たしてゆけるのか、日本語と日本文学の未来を設計してゆくこともまた我々の責任と考える。

大学における人文科学の教育研究が、もはや時代遅れの学であるという批判はますます強い。そのような声高な意見を、次の千年に残す現代の言語的文化的文化を切り開いてゆくことに對する、我々への期待と願望であると肯定的に受け止め、「埋もれ木の人知れぬ」ごとく、ひそやかにそして確実に歩みを進めてゆきたいと思つてゐる。

本号に掲載した想い出の写真を前にして、今更ながらに「文章は経国の大業」の感を持つ。我々が根無し草ではない喜びと、揺るぎない精神の拠り所としての伝統を持つ幸せを感じるのである。

国文学科主任 橋 本 雅 之